

---

# マーシーの短編集

マーシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マーシーの短編集

### 【コード】

N0170X

### 【作者名】

マーシー

### 【あらすじ】

作者が思いついたネタ等を集めて見ました。

## IS 諦めた少年（前書き）

以前短編で出していたのを此方に移しました。

鬱なのは仕様です。

## IS 諦めた少年

突然だが、家に帰りたいです

此処はIS学園、1年1組の教室なのだがハッキリ言ってキツイ。精神的に

なぜ、”男性”である自分がこの”女性”しか動かせないISを学ぶための学園にいるのかと言うと原因は世界初の”男性”適合者、織斑一夏のせいだ

アイツがISなんて物を動かしたせいで政府のお偉いさん達是他にも動かせる男性が居るのではないか、と男性国民全員を対象とした適正検査をしたのだが、そこで見事動かしてしまったのが、自分と言うわけである

どう考えても自分はお門違いである。アイツみたいに身内に世界最強だとか知り合いに世界最高の頭脳を持つ人が居るとか美少女の幼馴染がいる、なんて事は無い

さらにアイツみたいに自分は熱血漢でもないイケメンでもない。物事の飲み込みもアイツとはぜんぜん違うんだ

子供の頃からそうだった。他の子供たちは皆すぐにいろんな事を覚えていったのに自分は同じ事を何度も何度も繰り返してやっと覚えれるのである

”天才は1を知って10を知る”なんていう事があるが自分は”10回繰り返し1を知る”が基本なのだ

それなのに周りの人間は「どうして出来ないの？」とか「他の子供はすぐ出来るのに…」とか言ってくる。だから、自分はもう色んな事に対しての情熱など無く、ただ毎日が無意味に過ごしていた

高校も受験なんてしないでさっさと肉体労働系の仕事に就こうとした。幸い体だけは丈夫だったから

なのに、なのに！！ISなんていうエリート様が乗るような物の適合者になってしまい自分のこれからの人生は真っ暗になってしまった

なぜかって？自分はアイツと違い重要性がかなり低いのだ。アイツは身内と知り合いのおかげで各国のお偉いさんもそうそう手は出せないが自分は違う

身内にこれと言った有名人がいる訳でもなく、アイツのようにISの操縦技量が高い訳ではない。アイツと比べたらどちらが国にとって重要性が高いかなど誰にでも分かる

IS学園に所属している今はいいが卒業して、外に出ても政府はどうせアイツは守るだろうが自分は守ってくれるかは分からない。むしろ、貴重なサンプルとして他の国と取引の材料にされるかも知れない

そんな未来しか見えてこないうえに、このIS学園内でも自分はアイツの踏み台にしかなくていい

最初にそれが起きたのは登校初日、クラス紹介の時だ。アイツの後に自己紹介したがどいつもこいつも一夏、一夏、と自分の事とアイツの事を比べて比較する。そしてアイツの方がイイと言う

自分は比較されるためにここにいるんじゃない！！

さらにクラス代表生を決める時、誰もがアイツを推薦し自分は推薦されなかった。これはいい。自分はISなんぞに、興味は無かつたしクラス代表もなりたくなてなかった

なのに、なぜかクラス代表を決める試合に自分も出る事になっていた。なぜ？と思ったら何のことはない。ただアイツの専用機の「

初期化」と「最適化」を済ませる為の時間稼ぎとして戦わされる事になっただけだった

教師でありアイツの姉である織斑千冬に自分はこの試合には出ないと、いつて見たらなんて言っただけと思う？ 「お前も一夏と同じ男ならこれぐらいやってのける」 だと

ふざけるな！！自分はあるんだよ！！

それから何度も試合には出たくない、出ても負けると言ってもあのクソ教師、聞きもしやがらない

終いには出席簿で殴ってきやがった。これをされて自分は理解した。このクソ教師弟の為に自分を踏み台にさせる気だと

それが切欠なのかそれともずっと前からそうだったのか分からないが、もういろいろな事を諦めるようになった。自分がどう足掻こうとも結局自分は誰かの踏み台にされるのなら、もう足掻く事なんてやめて諦めた方がずっと楽だから

クラス代表生を決める試合の時、アイツには色んな人が集まってる。いろいろ声を掛けていたようだが自分にはそんな物は無く、よくて「試合がんばって」とお決まりのようなセリフを何人かに言われただけ

そして、自分と相手であるイギリス代表候補生との試合が始まったが、結果は惨敗。相手のシールドエネルギーを少し削れただけでボロボロにされた

当たり前である。相手は専用機持ちで起動時間も数百時間を越すようなエリート様で、こっちは量産機で起動時間なんて十時間にも満たないのだ

これで、勝てという方が無理な話である。惨敗して戻って見たら篠ノ……何とかと言う奴は「情けない、それでも男か」等と見当違

いの言葉を投げかけられクソ教師は「無駄な動きが多すぎだ、ばか者」等と教師として有るまじき言葉を発してきた

殴りかけたのを必死に抑え、一言「すみません」と言っただけ自分を褒めてやりたかった

その後、自分はさつさと部屋に戻りすぐにベットに入り寝た。いや寝た振りをして泣いた

どうして自分だけこんな目に会ったのか、どうして自分の事を分かってくれないのか、どうして自分は出来損ないなのか、とただ声を殺して泣いた

それから、クラス対抗戦や、転入生などが来たが同でもよかった。ただ、アイツと比較されて踏み台にされるだけの毎日だったから

でも、そんな毎日もあると終ってしまった

学年別トーナメントで自分はラウラとか言う奴と組む事になったのだがラウラは自分に「貴様は何もせずに離れている、邪魔だ」と言われ、その通りにどの試合も開始してすぐ壁際に離れていった。周りの奴らがなにやら煩かったがどうでもいい。どうせ出しゃばっても碌なことにはならないのだから

で、自分のチームとがアイツのチームと対戦する事になった時もラウラは俺に何もするなと言いつつ、一人で戦っていたが専用機持ちとの2対1ではさすがに分が悪かったようでも劣勢に追い込まれ最後一撃でラウラが負ける、という所で急にラウラのISが急変した

黒い全身装甲に一振りの刀を持ってアイツ達に襲い掛かった。さっきまでとは違い2対1でも余裕を持って相手に襲いかかっていた自分は壁際にただそれを見ていただけだった。専用機持ち同士で、

しかも一人は明らかに暴走していると所に自分が入って言ったってすぐにやられるだけだ

そうこうしている内に二人はやられてしまった。そして暴走したラウラがこっちに向かってきた

自分は逃げもせず、防御もしないでただ立っていた。逃げても逃げ切れるわけが無いし、防御しても防ぎきれ物ではないのはさっきの戦闘を見ていれば分かる

だから、自分は何もせずに凶刃に対して”首に当たるように”動いてやった

暴走した機体の凶刃はいとも容易く量産機の絶対防御を貫通し自分の喉を切り裂いた

暴走したこの機体の刀はアイツの専用機の単一仕様能力を劣化してはいるが似た能力を持っていたようで量産機程度の防御力は紙のように引き裂けた

首からの激痛に泣きながらも心は爽快な気分だった

これで、やっと楽になれる。誰かと比較されることは無くなる、と

霞む景色の中、そんな事を思いながら自分は意識を失った



## IS 諦めた少年（後書き）

寝る前に浮かんできたネタ。

これからもこんなネタが浮かんでくるから困る。

## IS 諦めた少年 ラウラ編（前書き）

読者様からその後が見たい、との事で書き上げて見ました。

彼が死ぬ原因をもう少し詳しく書いてみたつもりですが、まあ、そんな感じだったのか、程度でお読みください。

一気に書き上げるのは大変だったので、個人個人で分けて書いて見る事にしました。

まあ、そんなに人数は無いですけど。

## IS 諦めた少年 ラウラ編

「二人目の男性適合者が殺された」

その事は、世界中に衝撃を与えた。

この事件が世界中に広まって、さらに詳しく事件の詳細が分かった事によりさらに世界中に衝撃が走る事となる。

「彼はISに乗っていたのに死に至る致命傷を負って死んだ」

それはISの絶対安全性を覆す事であり、IS至上主義の女性達にとっては信じる事のできない事であった。

ISには「絶対防御」と言う搭乗者の命の危機に対して発動するあらゆる攻撃から身を守る機能が搭載されており、それによって搭乗者は現代兵器を上回る兵器を扱うIS同士の戦いでも命を落とす事無く戦う事が出来るのに、今回の事件でそんな思いは無くなってしまった。

「絶対防御」が発動しても死ぬ事がある。それはISと言う兵器に乗りながらも何処か命の危機に対して甘い考えを持っていたIS搭乗者達には想像もしないほどの衝撃だった。

だが、彼がもたらした出来事はこれだけではなかった。

## ラウラ・ボーデヴィツヒ

ラウラが彼からもっとも大きな影響を受けた人物だろう。たとえば彼を殺す事となった事に様々な要因や、ISに秘密裏に搭載されていた違法なシステムのせいで意識やISの制御を奪われていたとしても彼を殺した事に変わりはないのだから……

ラウラが彼を切り伏せた直後に生徒会長を含む専用機持ちで構成された突入部隊がラウラのISを止めに入った。暴走しているとは言え専用機持ち二人を相手にしてから複数の専用機持ちと戦う事はできなかったが、それでも暴走したラウラのISは突入部隊に対して数分の間戦ってみせた。そう、たった数分の間でも戦ってみせてしまったのだ。

実は彼はこの時、まだ助かる見込みがあつた。切られた直後にすぐに傷を縫い合わせ、輸血をしていればまだ、命だけは助ける事ができた。だがこれはすぐに助けられた時の場合である。

彼が切られた場所は喉であり、一緒に動脈も切られたのである。そのせいで彼の体からは急速に血液が失われていきつつ数分とは言え彼の体から致死量に至るだけの血液を流すには十分であつた。

彼を助けに来た生徒会長である更識楯無が彼の所に着いた時、彼の顔は血の気が失せ明らかに手遅れの状態であつたが、それでもわずかな可能性にかけて彼を救護室に運びIS学園内の生徒達から彼と同じ血液を持っている人物を探し輸血させたのが、楯無の奮闘も虚しく、彼は死んでしまった。

この事が楯無の心に影を落とす事となる。それは楯無がただの一

一般人ではなく「更識家」と言う対暗部用暗部という学園を裏から守ってきた組織の一員であると同時に、楯無が就任している期間の間に死人、それも世界で二人しかいない男性適合者の一人を死なせてしまったからである。

心に出来た影は彼が残したある遺品によってさらに楯無の心を蝕む事となる。

突入部隊によってISを停止させられて意識の無いまま救護室に運ばれたラウラだが、意識を覚ました時にラウラに突きつけられた現実にはラウラを絶望させるのに十分だった。

ラウラに突きつけられた物、それは専用機の完全解体、ドイツ軍IS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」の部隊解体、そしてドイツ軍からの除隊命令、さらにラウラ・ボーデヴィツヒの国外追放だった。

その事に対して当然抗議したものの事態はラウラが思っていたよりはるかに厳しい物だった。

「二人しかいない男性適合者をドイツ軍人が切り殺した」

実際にはそれ以外の様々な要因が有ったのだが、世界中の国々は結果だけを指摘し、それに至るまでの過程の事には何も言わなかったのである。

更には、何所からか情報が漏れ、ラウラのISにあらゆる企業・国家での開発が禁止されている違法なシステム「VTシステム」が搭載されていた事が発覚しその事もドイツを追い詰める事の一つと

なつた。

これに対してドイツ軍はラウラがいた部隊が独自に動き国とは関係ない、と発表した。

つまり、ドイツはラウラのいた部隊に罪を被せて、切り捨てた、という事だった。

ドイツ軍人となるために生み出され、厳しい訓練を耐え抜き一度はどん底に落ちるも特殊部隊の隊長にまでのぼりつめ、ドイツ軍人である事に誇りを持っていたラウラにとって、ドイツから突きつけられた事はラウラの精神を蝕み、壊すには十分であった。

ラウラはこの事で精神が壊れ、一般生活を送る事さえ困難な状態となつてしまい、残りの人生を一生病院で送る事となった。

今でも彼女は虚ろな表情で繰り返し呟く。「私は誇りあるドイツ軍人である」と……

## IS 諦めた少年 ラウラ編（後書き）

一人目はラウラさんでした。

初めの頃はもう少しマイルドだった気がします。

この作品、二回ほど書きなおしてるんですね。一回目は自分の不注意で消してしまい、二回目は保存しようとした時急にPCが再起動してオジャンに。

まあ、最初の方よりいい感じになったと思えばいいのかな。

**I S 諦めた少年 更識楯無編（前書き）**

二人目は生徒会長様。

何故、生徒会長様なのかは作者も分かりません。

気が付いていたら、書いてました。



## IS 諦めた少年 更識楯無編

更識 楯無

IS学園にて生徒会長を勤め、IS学園生徒の中で最強の名を持ち、それでいて対暗部用暗部「更識家」の現当主でもある。

そんな肩書きを持つ楯無だが、楯無から見た彼の評価は高い物では無かった。見た目や性格面、ISに対する意識が低い事など、もう一人の男性適合者である織斑一夏と比べると見劣りするからである。

無論、表情や態度にはそんな事は出さないで彼ら二人には接していたのだが、それでも彼に対して心の何所かで一夏と比べていたのかもしれない。

その思いがもたらした、たった一言が彼のその後を決める物とは思ってもせずに……

それは、学年別トーナメントが近づいて来た時の事。

楯無は一夏と彼に対して少しの間特別特訓と称して、ISの機動訓練を見ていてあげた時である。

その時すでに一夏と、彼との間にはかなりの差が出来ていた。同じ時期に入学し同じISに関しては素人であった二人だが一夏は専用機を貰っていたとは言え此处まで差が開いているとは思ってもいなかったのである。

それこそ一夏はイグニッション・ブーストを使用した近接格闘戦まで出来るようになっていたに対し彼は未だに高速で飛行する事さえままならなかった。

だから、楯無は言ってしまったのである。彼がどれだけの時間を費やしてきたのも知らず、軽い思いでただ一言

「君はもう少し努力したほうがいいんじゃないかな？」と

それを聞いた彼は急に顔を伏せ、そのまま一言「……気分が悪くなったので先に戻らせてもらいます」といい帰ってしまった。

さすがに無神経だったか、と思いはしたもののその時は追いかけてもせず残った一夏との訓練を続ける事にした楯無。

この時すぐに追いかけて、何か一言でも言っておけば彼の未来は変わったのかもしれないかった。

そして迎えた学年別トーナメントの日、楯無は一夏に軽く挨拶を済ましてから彼にも挨拶をしようと彼を見つけて彼にも挨拶をしようとしたら、彼は楯無の顔を見るなり逃げるように走り去ってしまった。その事になぜ？という疑問を思いはし追いかけてみようとしたがもうすぐに彼の試合が始まる事を思い出しそのせいかと思いその場は諦めて観客席に戻った。

試合が始まり彼の試合を観戦していたが、彼は試合が始まると同時にアリーナ内の壁際に移動して後は試合が終わるまで其処にいた。

その事に周りの生徒達がなにやら騒いでいて少しの間だけだが訓練を見ていた楯無も、少しは思う所があり、トーナメントが終わったら少し話をしようと考えていた。

そんな思いも彼らが一夏達と試合を始め、異変が起こった時に吹き飛んでしまった。

ラウラが一夏とシャルロットとの専用機二機と戦っている時も彼はアリーナの端で黙って見ているだけだった。

これまでの戦いとの疲労と専用機二機との戦いでラウラが負ける、と言う時にそれは起こった。

ラウラが急に呻き声を上げたかと思えば、ラウラのISが黒い霧のような物に包まれ黒い霧がなくなった後にはラウラのISは無く黒い全身装甲と一振りの刀を持ったISが居た。

その後の出来事は劇的だった。苦戦していたはずの専用機二機に対して一振りの刀だけで圧倒し始めたのである。

その時点で楯無はアリーナの進入ゲートに急行しその場に居た教師陣と他の専用機持ちを引きつれアリーナ内に突入した。

突入した楯無が最初に見た光景は――

「黒いISに首を切られた彼の姿」

――

――だった。

彼の首から吹き出る血を浴び此方に向く黒いISは死神のように見えた。

だが、そんな姿に怯むもすぐさま周りの仲間には指示を出し黒いISの無力化を始めたのは流石といえた。そして始まった、複数対単機の戦い。

流石に専用機持ち二人と戦った後にさらに複数の専用機持ちと教師陣、さらに生徒会長との戦闘はきつかった様で、数分で無力化に成功した。

が、この時複数で突入したのが仇になった。楯無のIS「ミステ

リアス・レイディ」の能力であるナノマシンを使った攻撃が出来なかったのである。

楯無一人だけで突入したなら、ナノマシンが含まれた水を使用した攻撃で一気に無力化が出来たのだが、この時黒いISの周りには一緒に突入した専用機持ちと教師陣のISが居て、離れるように言っただとしても黒いISの武器は刀だけであり常に誰かの近くに居たため攻撃が出来なかったのである。

ならば誰かが足止めをして彼を助けに行けば、と考えたが彼が居るのは黒いISの後ろであり黒いISはまるで彼を守るかのように突入部隊の前に立ちふさがった。

これにより救出よりも黒いISの無力化を先にする事にしたのである。

数分で無力化に成功した後、楯無はすぐさま彼の所に行き彼の容態を確認したのだが、彼の周りの地面は真っ赤に染まり、顔色も青白く体温も下がっていた。

すぐさま彼をアリーナ内から救護室に運び込み輸血のために彼と同じ血液型の生徒を探し輸血させるも治療が始まった時にはすでに手遅れで楯無や医者も奮闘も虚しく、彼は失血死という形で死亡した。

それからが大変だった。

楯無は本家である「更識家」からの彼を死なせてしまった事に対する状況説明に、各国政府に事情説明、IS学園全生徒に対するアフターケアなど、教師陣と一緒に四六時中働きっぱなしでありようやく一息ついた頃に彼の遺品を整理する事となったのだが、彼の遺品の一つが楯無の心に影を落とす事となる。

彼の遺品は驚くほどに少なく、学校から支給されたものの意外は殆ど無く私物も服などの生活用品以外は無く、ただ勉強道具だけが残されていた。

その中に有ったノートを見て楯無は驚いた。ノートの中には隙間無くびつしりとISに関する事が書かれており、何度も何度も読み直されている事が分かった。

ノートの数も30冊は越していてどれも隙間無く書かれておりそれを読むだけで彼がどれだけ努力していたのか分かった。

それを見た楯無は居た堪れない気持ちになった。楯無は彼の努力を理解もせずに「努力したほうがいいんじゃない？」といってしまうたのである。

そんな後悔の気持ちを抑え読んで行つたが、ある時を境に急に空白が目につくようになり、最後の方は何もかかれていなかった。

前のページを見てみると急にそこで書くのを止めたかのように……

その理由は、彼が残したもう一つの遺品であり彼の心の内を書き出した”日記”に有った。

それが後に彼と関わった人間、更には世界をも巻き込む事態になるとは誰も思いもしなかった。

日記の日付は彼が入学した日から書かれておりトーナメント前日まで書かれていた。

楯無はその日記を読み始めたのだが、読み始めていくうちに楯無の顔はだんだんと青ざめていき、ページをめくる手は振るえ、自分の呼吸音が酷く耳に残るようになった。

そしてある日の文章で楯無は自分が彼にした事がどれだけ彼を苦しめ傷つけたのかを知る事になった。

彼が残した日記。それには彼が学園に入学してから思ってきた事が書かれていた。其処には一度も楽しかった事など書かれてはおらず、どの日付を見てもどの文章を見ても苦悩と苦痛に彩られていた。

文章自体は短かったが、その日記には見る者の心に重く押し掛かる様な思いが込められていた。

この日記を読んだ、いや読んでしまった楯無はしばらくの間、いつものような明るい雰囲気は無く、何処か思いつめたような表情を浮かべ仕事ばかりしていた。まるで何かから逃げるかのように。

そして、彼が死んでからしばらくしてから彼の書いた日記が世界中に公表された。

誰が何時彼の日記を公表したのかは分からない。だが彼の書いた日記によって世界は大きく動く事となる。



彼の日記より一部抜擢

○月 日 晴れ

今日から、IS学園に入学する事になる。ハッキリ言つて嫌だ。あんな所に行きたくは無い。できる事なら逃げたいのだがそんな事が不可能と言う事は分かっている。たとえ嫌でも通わなくては行けない。ただの一般人が国の命令に逆らえるはずが無いから……

○月 日 曇り

IS学園に通い始めて、数日がたった。苦痛以外の言葉が見当たらない。何をしてもアイツと比較されそして勝手に批難される。こちらの思いなど関係ないのだろう、彼女達は。

こんな生活がずっと続くと思うとなると死にたくなる。まあ思うだけだが。

○月 日 雨

この学園にまともな教師は居ないようだ。



クラス代表を決める戦いに何故か俺も出る事になった。誰にも推薦されていないのに担任が勝手に決めて強制させられた。何度も俺は出たくない、戦っても意味は無い、と言ったのに碌に聞きもせずしまいには出席簿で殴ってきた。  
理不尽だ。

○月 日 晴れ

書きなぐりの文字と水で滲んで読めない

○月 日 晴れのち曇り

クラスに転校生が二人来た。それだけ。願わくば係わり合いになりませんように。

月○日 曇り

生徒会長が特別訓練と言って特訓を付けてくれる事となった。あいつと一緒に……

最悪、としか言いようが無かった。あいつは俺と同じ時期にISと関わったのにあいつは専用機を貰い戦い方も素人目の俺でも分かるぐらい上達していたのに、俺はあの時から全く上達などしていなかった。

あの時から毎日毎日遅くまで起きて勉強して勉強して、楽しい事も無くただひたすら努力したのに、どうやら俺の努力は天才様には努力とは言わないらしい。

「君はもう少し努力したほうがいいんじゃないかな？」

ハハ、努力すれば報われる？努力は裏切らない？そんな事は成功した奴が言うだけで出来ない奴は結局何をしてもし出来ないようだ。疲れた。もう色々な事に疲れたな……

月 日 雨のち雷

来週に学年別トーナメントが始まる。どうでもいい事だ。最近は何故か知らないが調子がいい。ISが動かせるようになったとかではなく、なんて言うか、こころが軽くなったというか、上手く言葉に出来ない。ただ、近い内に楽になれる、と言う予感があった。どうしてそう思うのかは分からないけどきっと楽になれる。

楽になればどうしようかな？今まで勉強ばかりだったから何か楽しい事がしたいな。

月+日 晴れ

明日、トーナメントが始まる。最近は何故か知らないが調子がいい。ISが動かせるようになったとかではなく、なんて言うか、こころが軽くなったというか、上手く言葉に出来ない。

ただ、近い内に楽になれる、と言う予感があった。どうしてそう思うのかは分からないけどきっと楽になれる。

楽になればどうしようかな？今まで勉強ばかりだったから何か楽しい事がしたいな。

新しい服やゲームを買って遊んで見よう。

きっと楽しいはずだから……

IS 諦めた少年 更識楯無編（後書き）

ラウラ編に比べると倍近い量になった。

なんでだ？

マジ狩るメイオー編 1 (前書き)

勢いで書いた。

後悔はしてない。

## マジ狩るメイオー編 1

それはただの思い付きだった。

グレートゼオライマーには次元連結システムが搭載されているのだが、このシステムは何所まで出来るのか、とふと思ってしまったのだ。

で、何所までできるか試して見ようとした結果が……

平行世界への転移だった。

これは無い。マジでない。本当に無いよ。

これにはかなりかなり焦った。よくて長距離転移とかだと思ってたら並行世界に転移するとか無いわ。

元の世界に戻るのかどうか調べたら、すぐに戻れると帰ってきた。よかった。ちゃんと戻れるのか。しかも此方で何時間過ごそうとも元の世界に戻る時時間軸も調整するとかで転移した直後に戻れるとかで向こうの生活を気にする必要は無い、とか言ってきた。

いや、そういう問題じゃないのだが……

とりあえず元の世界にちゃんと戻れるとの事で落ち着いたので近くの町を探索して見る事に。少しの間町を歩いて見たが、並行世界なだけあって元の世界に似てはいるがやはり違う所は違う。

ISの事が何も無かった。

この世界には篠ノ之束をはじめとする向こうの世界でISに関わりのある人物はいないようだ。だからこの世界はISが登場しなかった場合の世界、という事だ。

しばらく歩いていたら少し小腹が空いたので何所かで軽く食事をしようと思い、何処か良い所が無いかと探していたらいい感じの喫茶店を見つけたので其処で軽く食事をする事にした。

ちなみにお金はGZがすでに何所からとも無く調達していたので心配は無い。

「いらっしゃいませ。お一人様で？」

「はい」

「では、カウンター席にどうぞ」

「分かりました」

此処の店員は肝が据わっているらしい。俺の顔を見てもビビらないとは……

「ご注文は？」

「……日替わりランチセットで」

「分かりました。ではしばらくお待ちください」

「お願いします」

料理が届くまでどうしようと思っていたらコーヒーが出された。

「?これは」

「サービスですよ……お客さんはこの町には何しに?」

「……旅行の途中でよっただけですよ」

「旅行の途中で?」

「ええ。少し遠い所から移動中でしてね。まあ時間に余裕があるから寄り道しながら移動してる最中ですよ」

「そうなんですか……」

「まあ、この目つきでいろいろ大変ですけどね」

そついうと苦笑いされた。

「っと出来たようですね。こちらが今日の日替わりランチになります」

「いただきます」

出てきたランチを食べ、サービスで貰ったコーヒーを飲み会計にいく。

「700円になります」

「?コーヒー代が入ってないですよ」

「いえ、アレは主人が出したサービスですから」

「……悪いですねなんか」

「いえいえ」

「ではそのシュークリームを4つ持ち帰りをお願いしますか」

「あら、よろしいので」

「ええ。食後の甘い物が欲しかったので」

「分かりました。ではシュークリーム4つお持ち帰りで」

シュークリームが入った箱を貰い出て行こうとしたら

「ただいまなの」

女の子が入ってきた。

「失礼」

「あ、ごめんなさい」

一言言っ出て行く俺。

「……今の人」



喫茶店を出てふらふら歩いているといい感じに公園があったので  
其処でシュークリームを食べる事に。

「……うまいな、このシュークリーム」

おいしい物を食べていい気分だったのに、GZから報告が来た。

<異空間二隔離サレマシタ>

「異空間？隔離？何だ」

周りを見てみると何も変わらない静かな公園だった。いや、静か  
過ぎる公園だった。

（なんだこれは。夕方とは言え静か過ぎる。異空間に隔離された  
という事はこういう事か）

立ち上がり周りを警戒していたら一人の女性が此方に歩いてきた。

「誰だ！」

「……貴殿には何も怨みは無いが、我が主のために貴様の魔力、  
奪わせてもらうー!!」

「魔力？何の事だ」

「問答無用!!」

言い放つと同時に切りかかって来た。切りかかって来たのだが

「つつ！バリア！貴様魔導師だったのか」

「魔導師？さっきから何を言っているんだ」

「惚けても無駄だ！私達の事を知られたのなら此处で倒させてもらう！！」

此方の話を聞かず切りかかってくる女性。だがGZが作りだしているバリアを破るにはパワーが足りなさ過ぎてどうにも出来ないままだった。

（なんという硬さだ。私の攻撃が全く通用していない）

「……フウ、どんな理由があるかと攻撃してきたのはお前だ」

「なにを……」

「だから、これは自衛行動だからな」

そう言いながら右手を相手に向け

「吹き飛ばす」

次元連結砲を打ち込んだ。

「ガア！！」

公園の奥に吹き飛んでいく女性。それを確認し、吹き飛んだ方向に向かって歩いていった。其処にはたった一撃でボロボロになった女性がいいた。

加減に加減をした一撃でも流石に生身の人間にはキツかった様で、動く事すら出来ないほどの傷を負っていた。

「カハッ、ゴホッゴホッ」

辛そうに咳き込む女性だが、手加減はするつもりは無いのでそのまま歩み寄り背中を踏みつけた。

「ゴハア!!」

「さて、なんで俺を狙ったのか話してもらおうか」

「だ、誰が喋るか……」

無言でさらに強く踏みつける。

「ガアアア」

「さっさと喋れよ、屑が」

「だ、れが言う、物が」

強がりと言う女性だが

「言つとくが助けは来ないぞ」

「な、に」

「お前が作ったこの異空間、すでに此方で掌握済みだ。だから俺とお前と以外はこの空間には居ないし俺が許可しない限り出入りも通信も不可能だ」

「バカ、な。そんな事ができるはずが……」

「フン、こんな事次元連結システムのちょっとした応用で何とでもできる」

「く、そ」

悔しげに顔を歪ませる女性。

「時間も勿体無いし、貴様が喋る気が無いなら無理やり聞くだけだ」

「何をする、つもりだ」

「こうする」

女性の頭を掴みそのまま持ち上げ、女性の頭から強制的に情報を抜く事にした。

「ガアアアアアアア！……！！」

「……ふん。おまえ人間じゃないのか。データの集合体か実体を持っているのか」

「gggjぢrにゅeyrmnpssmbら@!~!~!~!」

もはや言葉にならない声で叫ぶ女性。

「面白い。気が変わった。お前はそのままデータとして貰って行く」  
「う」

そう言うのと同時に彼女の体が透けていきキノに吸収されていく。

（あ、るじ……もうしわ、けありま、せ……）

吸収が終わりその場を去るキノ。残ったのは破壊された公園と、瓦礫に埋まった彼女の持っていた剣だけだった。

## マジ狩るメイオー編 1（後書き）

本編が行き詰まり、短編の方もなかなかネタが纏らず息抜きとして以前書いたネタであるリリカル編を書いてみたらまさかの展開に。

メインキャラの一人が即退場してしまった。どうしよう。

このまま消えはしないと思うのだけど、どうしようかな。

あと、キノの性格やら口調が可笑しいのはパラレルという事で目を瞑って下さい。

## マジ狩るメイオー編 2（前書き）

どうしよう、ネタが溢れてきた。

本編は進まないのに。

## マジ狩るメイオー編 2

「シグナムと連絡が取れないだって！！という事だよ！！」

深夜のビルの屋上に響く声。

「それが、今日の夕方私と一緒に大きな魔力反応があったから蒐集に向かったのだけど最初に結界魔法で隔離したのだけど……」

「隔離してどうしたんだよ」

「その、隔離して少したら私だけ空間から弾き出されてしまったのよ」

「ハア！？という事だよそりゃ。シャマルだけ空間から弾き出されるって。結界魔法を使ったのはシャマルなんだろう。なんで使用した本人が結界から弾かれるんだ！！」

「私の方が知りたいわ！！確かに結界魔法は成功したのにまるで結界魔法ごと制御を奪われたような感じがしたわ」

「他人が発動している魔法の制御を奪うなんて聞いた事ねーぞ！」

言い争う二人女性の間に割ってはいる一人の男性。

「二人とも落ち着け」

「これが落ち着いてられるか！！シグナムが攫われたかも知れないんだぞ！！」



「こういつ時こそ落ち着かなければ何も進まないだろう!!」

「「っ!!」」

男性に一喝され落ち着く女性二人。

「……すまねえ、ザフィーラ。取り乱した」

「構わん。我だって驚いているのだから。シャル、結界が消えた後その魔力を持った者はどうしたんだ」

「それが、サーチャーを使っても近くには居なかったの。変わりにこれが……」

取り出したのは、一振りの剣だった。

「それ、はシグナムのレヴァンティンじゃねえか」

「この子、かなりのダメージを負っているみたいでデータを復元するには時間が掛かりそうなの」

「……どのくらい時間が掛かりそうだ」

「分からないわ。少なくとも2週間は掛かるは」

すまなさそうに言うシャル。

「……そうか。主にはなんと言っべきか」

「そうだよ。はやてになんて言えばいいんだ」

「仕方ない。とりあえずはしばらくの間は仕事で居ないと言っておこう。とはいってもせいぜい2〜3日が限界か」

「じゃあ、その間にシグナムを攫った奴を探し出してシグナムを助けねーと」

「ええ、そうね。じゃあ、これがシグナムを攫った人物の魔力パターンと姿のデータよ。デバイスに送っておくわ」

「分かった。確認しだい探そう」

「じゃあ、今はとりあえずはやてちゃんの所に戻りましょう」

「ああ」

「分かった。今ははやてにシグナムが居ない理由を言っておかないとな」

とりあえず、その場から去る三人。それを離れた場所から見ていた人物が一人。

「……いけない。このままでは父様の計画に支障が起きる。アイツは危険過ぎる。手を打たなければ」

そういった後何処かに消えていった。

「ねえ、ユーノ君」

「なんだい、なのは？」

「今日学校から帰ってきた時なんだけど、お店から出てきた人から魔力を感じたの」

「魔力を？」

「うん。レイジングハートにも確認したんだけど間違いないって」

「レイジングハートが……もしかして」

「ユーノ君が考えてる事とたぶん同じ事を私も考えてるの」

「なのはも？」

「そうなの。だからリンディさんに相談して見ようと思うんだけど」

「うん、それがいいと思うよ。勝手に動くのは不味いからね」

「ふん、なるほどね。魔力でデータを実体化させてるのか」

「……っ……！」

「魔力、ね。この世界はファンタジーの世界だったとはね」

「……！……あ」

「いや、GZも十分ファンタジーかな？そう思わないかい」

「あ……う……」

「ねえ、シグナム、いや闇の書の守護プログラムといった方が正しいのかな。まあいいか。もうすぐ終るからね。再構築がね」

「あ……るじ」

## マジ狩るメイオー編 2（後書き）

ネタが、暴走する！！

そして本編は進まないという罫。

### マジ狩るメイオー編 3（前書き）

脅威の3話連続投稿！

まあ短いから出来るんですけどね……

あとこの話で残虐表現が出てきますので嫌な人は読むのをおやめください。

注意しましたからね？



### マジ狩るメイオー編 3

シグナムとか言う奴が襲い掛かってきた次の日の早朝、まだ薄暗い時間。

俺はまた異空間に隔離されました。

油断した。と言うか同じ事ができるやつがまだ居たなんて。昨日はシグナムを隅々まで調べるのに夢中になってたから隙を作ってしまったようだ。

で、この隔離空間を作った奴が今目の前に居るようなのだが、うん。不審者過ぎる。

黒いロングコートに仮面をつけて薄暗い道路に仁王立ちしてるとか、マジ不審者。

まあ、俺も人の事言えないけど。

「……」

「……」

お互いに無言でにらみ合う。

「……っ、貴様は我々の計画に不必要だ！此処で消えてもらおう！」

そう言って急接近してくる仮面男。が、シグナムと同じくGZが作り出すバリアを貫くには力が足りなさ過ぎるようで、猛攻撃を仕

掛けるもバリアは揺るぎもしない。

（っ！なんて硬さ。これだけ攻撃しても揺るぎもしないなんて）

「ハア……一応言っておく、先に攻撃してきたのはお前だからな」

右手を仮面男に向け言い放つ。

「潰れる」

次元連結砲を打ち込む。真下に向かうように。

「グフウウ！！」

仮面男は地面に押し潰された様にめり込んだ。それを見て俺は歩み寄りそのまま踏みつけ様として、真後ろに次元連結砲を打ち込んだ。

「ガアアア！！」

俺の後ろにはもう一人仮面をつけた男が居た。

「残念だが見え見えなんだよ」

そう言いながら最初に攻撃した仮面男を後ろに吹き飛んだもう一人の仮面男の方に蹴り飛ばした。

「キャアア！」

重なり合うように倒れる二人の仮面男。

「……さて、どうしようかね」

と言いながらも二人に左手を向けて言う。

「GZ、捕獲隔離用バリア展開」

<了解>

そういつた直後二人は別々の球体状のバリアに包み込まれる。

「……とりあえず連れて帰るか」

そしてGZの機能で隠れ家に転移する。

「此处だね、フェイトちゃん」

「うん。大きな魔力反応があつたのは。でも何所にもそんな反応は残ってないよ」

「もう移動しちゃったのかな？」

「たぶんそうだと思う。取り合えずリンディさんとクロノ君に連絡しよう」

「うん。そうしよう、フェイトちゃん」

此処はGZが作り上げた隠れ家。隠れ家と言うが家があるわけではなく、次元連結システムを応用して作り上げた異空間にある空間である。

GZの許可が無い限り出入りは不可能であり、この空間自体が他の空間と完全に隔離されているのでこの世界の魔道師？とか言う奴らが使う転移魔法ごときでは進入するには数十世紀は掛かる様な場所である。

「さて、と……起きろ」

「ギヤア」

「ギイイ」

二人が入っている捕獲隔離用バリアの中に電流を流して強制的に

起こす。

「目だ覚めたかな」

「き、さまは……」

「……は……」

「此処は俺の隠れ家。で、お前らは俺に負けて捕まり此処に連れてこられた。以上」

分かりやすく状況を教えてやった。

「さて、まどろっこしいのは嫌いなんだな。単刀直入に聞く。なんで俺を襲った」

「……」

「だんまりか……」

予想通り何も喋ろうとしない二人。

「俺としてはさっさと喋ってもらいたいんだが、どうにも喋ってもらえそうに無いな」

二人の顔を見ながら言う。

「……じゃあしょうがない。片方は処分するか」

「……」

「じゃあ、最初に襲ってきたお前で」

そう言うのと同時に最初に襲ってきた方の仮面男のバリアが縮小し始めた。

「な、何をする！止める！！」

「……」

「ロツテ！！」

どうやら始めに襲ってきた方の男はロツテと言っらしい。

「ぎ、iiiiiii」

バリアの大きさが一人が入れるぎりぎりまで縮小し呻き声を上げるロツテ。だが止めはしない。

「が、ああああ」

「ロツテ、ロツテエエエ」

隣に居る二人目の男が叫んでいるが止める事はしない。

「……！！……あいいい」

体中が強制的に球体状に丸められ骨が軋み折れ曲がり、肉がへしやげ内臓を圧迫しもはや喋る事すら出来ず口や目、耳から大量の血を流し、それでも強制的に圧縮されていくロツテ。

「……………!!!」

二人目の方は煩かったので途中から声を遮断しているのだが泣きながらバリアに攻撃しているも破れる筈も無くただ見ているだけしか出来ない。

そしてロツテと言われた人物が入っていた球体は掌サイズにまで圧縮されてしまい、血の色で真っ赤に染まっていた。

それを俺は無造作に掴み、握りつぶした。

「!!!!!!」

そして握った手を広げると其処には無いも残っては居なかった。

「さて、片方は処分したがお前はこうはなりたくないだろう？なりたくなかったらなぜ俺を襲ったのか教えてくれるか」

遮断していた声を元に戻したら

「殺してやる!!!殺してやる!!!!!!」

目から血の涙を流しながら俺に向かって吼える声しか聞こえなかった。

「ハア。素直に話してくれればいいものを」

ため息をつきながら俺はGZに指示を出す。

「GZ、修復機能機動」

<了解>

その声と共に吼えている彼女の隣に” ロッテ” が出現した。

「…………え？」

ロッテの出現に呆けるもう一人の男。

「…………ここ、は…………」

「気が付いたか？」

「……！！」

飛び上がるように驚くロッテ。

「お前さっきまでの記憶覚えているか」

「さっきのきお、く…………ひiiiiiii」

呆けた顔から一気に恐怖に怯え、蹲るロッテ。

「シッカリと覚えているようだな。この場所では俺の許可無く死ぬ事も狂う事も出来ない」

「……！！」

「で、もう一人の奴が俺を襲った理由を覚えてくれないからさ……  
…もう一回死んでくれる？」



その言葉と同時にロツテの捕獲隔離用バリアが縮小を始める。

「いや、いやあああ!!」

「ロツテエエエエ」

「煩い」

「……!!」

「まあ、教えてくれるようになったら呼んでくれ。隣の部屋に居るから」

そう言い踵を返し部屋から出て行く。

「待つて、待つてええええええ」

「!!……!!」

なにやら煩いが気にしない。

この隠れ家、異空間に有る事とGZの機能を利用して時間の流れを調節できるのだ。部屋単位で。

俺が基本居るリビング的な所を基準にして場所によっては1000倍早く時間が進む所や逆に1000分の一の時間しか進まない部屋とかがある。必要性が有るかどうかは別として。

ちなみに俺が部屋に入っている場合のみ時間の流れはリビングと同じ流れになる。そうしないとんでもない事になるからな。

で、さっきの二人が居た部屋はリビングの1分が中の一日になる所だった。それに気が付いたのは二時間ぐらい立ってからだった。

球体の縮小はきっかり10分掛かるように設定してあるから、1時間で6回。1日で144回。で二人が入っている部屋は1分が1日になる部屋。1日は1440分、かける2で2880分。つまり二時間で約8年近く過ぎる事になる。

で、144かける事の2880は414720



「はいいいいーーーーー」

「じゃあ、俺を襲った理由、教えて」

「はいいい、喋ります、喋りますううう」

で、聞いた結果。どうやら俺は厄介事に巻き込まれていたようだ。

何でも前回俺を襲ってきたシグナム、と言うのは闇の書と言う口ストロギアとか言う物に入っている守護プログラムの一種であり、この闇の書。破壊・改竄されても即座に修復する「無限再生機能」と、本体の消滅や所有者の死亡をトリガーにして新たな主たる資質を持つ者の下に転移再生する「転生機能」の二つの機能のせいであらゆる場所に厄災を撒き散らす凶悪な危険物らしい。

ではなぜこの二人が襲ってきたのかと言うと、二人の主人であるギル・グレアムという人物が闇の書の今現在の主である「八神 はやて」ごと凍結魔法で凍らせて封印するためにあえてシグナム達を泳がせていたのに俺がシグナムを捕まえてしまった事で計画に支障が出ると判断して俺を襲ったらしい。

ハァ……。どうしてこうも厄介事に巻き込まれるのかね、俺は。

「喋ったから、出してよ。ここから出してよおお」

「ああ、そうだったな。出してもいいな」

「本当ー!!」

「この厄介事が終つたらな」

「……え？」

「今、お前達をここから出してもなんか厄介事しか起こらなさそうだから、この厄介事が終つたら出してやるよ」

「そ、んな」

「じゃ、また後で」

「ま、待つて待つて————出してえええ———此処から出してえええええ—————」

「そういえばあいつらって男なのに女の名前付けられてるのか？  
不憫な」

### マジ狩るメイオー編 3（後書き）

酷い出来だ。これは酷い。

腐ってやがる、作者の脳味噌は……

アリア&ロツテファンの皆様すみません。

## マジ狩るメイオー編 4（前書き）

どうしよう。本編よりこっちの方が続くなんで……

デバイスの声は脳内で再生してください。



## マジ狩るメイオー編 4

今日は昨日一昨日のようなミスはしない。なぜならGZにシグナムと仮面男達が使っていた魔法？とやらを解析させたからだ。

あいつらが使う魔法はどうやらファンタジーに出てくるような魔法ではなく、技術の一つという事が分かった。

魔道師という貯水タンクに入っている魔力と言う水を、デバイスと言う蛇口を使い術式と言うコップに必要な分入れる事によって魔法は発動する。

ややこしい事を言ったが要はデバイスが無ければ魔道師という存在は魔法を碌に使えない、と言う事だ。

無論例外はあるが大体そんな感じである。で、デバイスは結局は機械部品なのでGZに掛ければハックし放題である。量産型の機械がGZにかなうわけが無い。

ついでに魔道師が使う魔法は技術の一つなので対抗手段は簡単に作れた。よって今の俺に対して魔道師が使う魔法は通用せず、結果魔法にも引つかからないようになっていく。

これで厄介事とはおさらばだぜ！……と思っていた時がありました。

「すみません。ちょっといいですか？」

「？」

後ろから呼び止められ振り向いたら一人の女性と一人の女の子と一匹の大型犬がいた。

「何でしょうか」

「すみませんが最近こちら辺でこの写真の人物を見ませんでしたか？」

そう言われ渡された写真にはピンク髪をポニーテールに纏めた女性  
性が写っていた。

「……いえ、知りませんが」

「本当ですか？」

「ええ」

「そ、うですか。お手数をおかけしました」

「いえ、御気になさらず」

そう言っ  
て背を向け離れようとしたら

<結界魔法ノ発動ヲ確認>

GZからそう報告が来て振り向くとさっきまで居た二人と一匹が  
居なくなっていた。

「……？」

さっきの奴らは何所に行ったんだ。まさか奴らが魔法を発動させた  
のか。ご苦労なこつて。

今の俺は魔道師が使う魔法には一切反応しないようになってるから、結界魔法を使用して俺を隔離しようとしても無駄なのに。

「……帰るか」

隠れ家に帰ろうとしたら

「お前、ちよつと待てよ!!」

また後ろから声を掛けられ振り向いたらさっきの二人と一匹が思いつきり睨んでこっちを見ていた。

「まだ、なにか？」

「まだ、なにか？じゃねー!!お前シグナムを何所に連れて行っただんだ!!」

「シグナム？」

「さっきの写真に写っていた奴だよ。お前が攫ったんだろ!!」

「いやいや、何を根拠に」

「うるせー!!つべこべ言わずにシグナムを返せ!!」

そう言うと同時に女のこの方がハンマーを何所からとも無く出して殴りかかってきた。無論GZのバリアで防いだが。

「っ!!なんて硬さだ」

「……ハア。いきなり襲ってくるのはどうかと思うんだが。しかもこんな住宅地で」

「仕方がねえだろう。お前が結界魔法の対象にならないんだから、お前のせいだよ」

「フウ、しょうがないな。GZ」

< 完全隔離魔法発動 >

GZに発動させた魔法は魔道師達が使う結界魔法を解析してGZが作り上げた魔法で名前の通り一定範囲の空間を完全に隔離する魔法であり出入りはGZが許可しない限り不可能で通信や転移魔法も不可能。

しかも発動中は外からも探知は出来ない仕様であるので中に入ったら最後、GZの許可が無い限り永遠に隔離され続けるのだ。

ちなみに結界の強度はフルパワーのデットロフンでギリギリ破壊できるぐらいの強度なので魔道師程度の力では破壊は不可能である。

「これは結界魔法。お前やつぱり魔道師だったのか」

「いや、魔道師では無い……」

「ごちゃごちゃうるせー！！シグナムを返せー！！」

そう言っってはまたハンマーを振り上げ襲ってくるがGZのバリアは揺るがない。

「くっそ、グラーファイゼン、ギガントフォーム」

<ギガントフォーム>

その声と共にハンマーが巨大化した。

「まだまだー、カートリッジフルリロード」

<カードリッジフルリード>

巨大化したハンマーから銃弾の薬莢のような物が4つ程飛び出すと共にさらにハンマーが巨大化した。

「潰れるー！！！！」

その超巨大化したハンマーを見た目に合わない速度で振り下ろして来たが、俺は避けなかった。

「はあ、はあ、はあどうだこれで……」

「エネルギー波、発射」

<発射>

「な！！」

眩い光が放たれ、超巨大化したハンマーが彼女が持っている柄部を残して消滅した。

「残念だが、その程度ではヒビすらはいらないんでな」

「そん、な……」

残った柄を見て信じられないと、呆ける彼女。

「うおおおおお」

叫びながら噛み付こうとしてきた大型犬に対して

「次元連結砲発射」

<発射>

次元連結砲を叩き込む。

「がつ!!」

吹き飛び住宅の壁を突き破り中に突っ込む大型犬。

「ザフィーラ!! ヴィータも確りして!!」

残った女性が仲間の名前を呼び女の子の方に駆け寄りこちらを睨むが、もう遅い。

「グウ」

「ギャ」

目の前に転移して二人の頭を掴み、シグナムと同じようにデータを吸収する。

「ぎゃああああー」

「いやああああー」

二人分と有って少し吸収するのが遅いが気にせずに吸収する。

「m b r h s ん り h ん s l b y ぶ @ b k t む あ え」

「v r ん j た ん r べ え 8 9 あー ゆ w y h y y ん b」

シグナムと同じく言葉にならない声で叫ぶ二人。

「や、めろー」

さつき大型犬が突っ込んだ所から成人男性が飛び出し、殴りかかってくる。

「邪魔」

一言言っ てまた吹き飛ばす。

「が あ あ あ あ」

「……三人分もあれば十分か。だからお前は要らないや」

二人を吸収し終わり、吹き飛ばした方に左手を向け

「エネルギー波、フルパワー」

<エネルギー波、フルパワー>

フルパワーでエネルギー波を打ち込んだ。

「がはぁ、ごほっ」

咳き込みながらもキノの方を見た男性が見たのは、全てを飲み込む眩い光だった。

「……！……っ……」

「エネルギー波って、フルパワーで放つところなるのか」

其処に広がる光景は結界の端まで届く数十メートルにも広がる深い溝があった。しかも地面は融解してガラス状になっていた。

「こんなパワーで撃つても結界壊れないんだ」

そんな風に思ってたら足元にある本に気が付いた。

「これは……これが闇の書、か？」

さっき吸収した片方が持っていた本がシグナムの情報から得た闇の書の見た目と同じだったので、これももって帰ることにした。

「……このままでいいか」

この時、面倒がらずにGZに吸収させておけばよかったと、後々



後悔する事になるとは思いませんでした。

「GZ、完全隔離結界解除」

<解除シマス>

結界を解除して通常空間に出た所で

「え！」

「ふえ！？」

「だれだ！！」

三人の子供に出会わした。

「転移で帰ればよかった」

## マジ狩るメイオー編 4（後書き）

はい、ヴォルケンリッター全滅しました。

次回の登場は目にハイライトが無い状態での登場です。

いや、意識が無いって意味ですよ。

## マジ狩るメイオー編 5（前書き）

どうしよう、マジでどうしよう。

本編よりこっちのネタしか浮かばない。

## マジ狩るメイオー編 5

今、俺の目の前には三人の子供が居る。大体身長から見て中学生ぐらいだと思うのだが、此処で疑問がある。

今日は平日じゃなかったか？

「あ、あのちよつといいですか」

「よくないです」

「うう、そのちよつとだけお話して欲しいんです」

「断る。急いでいるのでこれで」

その場から退散しようとしたのだが

「まて!!」

少年に呼び止められた。が、無視して進んでいく。

「つく、ならば!!」

何かしようとしていたので振り向いたら三人が居なくなっていた。  
またこのパターンか。

仕方が無いのでその場から離れようとしたら

「バインド!!」

と言う声が聞こえてきたのでもう一度振り向いたら

「え、なんで魔法が発動しないの!？」

なんと言うか、アニメのキャラが着ているような服に着替えた三人が居た。

「レイジングハート、どうしたの？」

「……」

「レイジングハートどうなってるの!？」

ツインテールの女の子が赤い球体の着いた杖に話しかけ

「バルディッシュ、行くよ」

「……」

「バルディッシュ!？」

金髪の女の子も金属の棒に話しかけ

「どうなってるんだ、S2U、S2U!！」

黒髪の男の子がハンドガンに話しかける。

「……これが中二病って奴か」

コスプレをして魔法の杖?に話しかける。まあこの位の少年少女には良くある事だ。そういう事にしておこう。

「クソッ、どういう事だ……って何だその「俺は分かってるよ」  
見たいな目は……」

「大丈夫、俺はそういう事をしているのに、とやかく言う気は無いから」

「貴様、時空管理局の執務官を馬鹿にするのか」

「次元管理局ね……そういう設定か」

「設定じゃない、本当に有るんだよ」

「分かってる、分かってるよ。君の心の中に有るんだろ」

「ちーがー！うー！本当に有るんだよ時空管理局は」

「はいはい、妄想妄想」

「……っそれ以上馬鹿にするなら、公務執行妨害で逮捕するぞ」

「どうやって？」

「魔法で捕まえて……」

「……魔法？」

「そっだ、束縛魔法で捕まえる」

「その、少年。大丈夫だまだ君の年なら十分に間に合う。だから

病院に行こう」

「だ！かー！妄想じゃ無いって言ってるだろー！！」

「大丈夫だ最初は皆そう言っただから」

「馬鹿にしゃがって、バインドー！！」

此方にハンドガンを向け叫ぶ少年。だが

「なんで発動しないんだ、バインド、バインドオオオー」

何も起こらない。

「……」

「止めろ、そんな「悲しいような物」を見る目でこっちを見るな

――」

頭を抱えて蹲る少年。

「だ、大丈夫なの。クロノ君」

「に、兄さんー！！」

二人の少女に介抱される少年。

「ここが潮時か。」

「……まあ、妄想も程ほどにな。俺は急用が有るからさよならだ」



そう言って駆け足で離れてく。

「ちょ、まってなの〜」

聞こえない。

タネ明かしすると三人が一度消え、もう一度出てきた時すでに三人が持っているデバイスはGZの支配下にあった。オーダーメイド

っぽい感じだったようだがGZの前では量産機と同じだ。

なので、すでに発動している魔法以外の魔法の発動は不可能にして、さらに機能の殆どを停止させ、ただの機械の塊にしてやった。

まあ、俺が離れた時点で機能は回復するようにプログラムしておいたが。

ちなみに三人が持っていたデバイスにはGZがした事の痕跡は一切残っていない。だからどんなに調べようとも不作動にしか思われないのだ。

あと、三人、特に少年と喋っていた時何所からか通信があったようだが全て遮断しておいた。ついでに逆探知させて発信源の機械を通して其処にあったデータを全てコピーしておいた。  
後で確認しよう。

さて、先ほどの三人を振り切った後、いざ隠れ家に帰ろうとしたら

「あ、あのすんまへん」

「??」

「その本、どこで手に入れたんですか？」

車椅子に乗った少女が話しかけてきた。

「今日は厄日だ」

## マジ狩るメイオー編 5（後書き）

関西弁は難しい。

知ってる？中二病や黒歴史って酷いものになると鬱病にかかるんだよ。

## マジ狩るメイオー編 6（前書き）

すでに原作のげの字もなくなってしまうている。

はや……チビ狸どうしようかな？

このまま冥王様の下に着かせるか、それとも鬱展開にするか悩む。

## マジ狩るメイオー編 6

今俺の前にいる車椅子に乗っている女の子。この子が現在の闇の書の主である「八神 はやて」である。

詳細はシグナムのデータとこの前捕まえた仮面男から大体は知っているが、さて、どうしようか。

「あの〜ウチの声きこえとるん？」

「あ、ああ。聞こえてる」

「さやか。そのな、その本何所で手に入れたん。その、ウチの家族が持つてる本とそっくりなん」

「そう、なのか？これは今さっき近くの道端で拾ったんだが」

「そうなん！変やな〜シャルが大事にしようとした本なのに……」

「……まあいい。どうせ拾った物だ。君の知り合いの本と言っなら君に渡しておこう」

「ほんまか！渡してくれるんか」

「ああ。もう”必要ない”からな」

「ほんまおおきにな」

そう言いながら彼女に闇の書を渡し、彼女と別れる。

彼女に渡した闇の書。実はすでに中身のデータを根こそぎGZに写し終わっているのだ。あの本自体はすでにただの厚い本なのだ。

GZにデータを移す際にやら抵抗があつたようだが、カビの生えた骨董品風情がGZにかなう筈も無くすぐさま機能の全てを支配してデータを圧縮してGZの中にあるファイルに押し込んでやった。データを移す際に闇の書と八神との間に繋がりのようなものがあつたが気にせずに移した。結果、闇の書と八神との間にあつた繋がりは無くなったが別に問題は無いだろう。

これで闇の書のデータは全て手に入れることができた。

……手に入れてどうしよう。シグナム達守護騎士プログラムは実験材料としては面白い物だが、闇の書の無限再生機能はすでに有るし、転生機能は別に欲しくないし、鬼集は別にする必要性は無いしな。

とりあえず隠れ家に帰ろう。

隠れ家について早速、GZの中の闇の書のデータを解析して見たら、これは酷い。

あちらこちらにバグが発生しており、さらに無駄なデータや必要性の無いプログラムなどがかなりの数あった。

なので、バグを修正し、無駄なデータやプログラムを一切合財全部削除して空いたスペースにGZが収集してきた魔道師が使う魔法のデータ魔改造した物を入れ込んだ結果、闇の書は完全に別物になった。

前と違い真っ白な表紙に細く濃い紫色の線でGZが描かれている見た目になった。

だから名前も変えておいた。闇の書から、冥王の書に変えておいた。何の捻りも無いが変に可笑しな名前をつけるよりいいだろう。

そういえばデータを弄っている最中になにやらシグナム達と同様のデータがあつて、管理プログラムとあったのだが、管理はGZがするからいらなそうと思ひ基礎のプログラムを残して消してしまった。後で気が付いたのだがこの基礎プログラムも所々バグや欠損があ



ったので消す前の状態には戻せなくなってしまった。

……まあ、問題は無いか。

それとなにやら元からあった防衛プログラムもバグっていたようで、闇の書が今まで集めていた魔力を使い実体化し、襲ってきたがGZのバリアを突破する事はできずうつとおしかったので隠れ家の外である異空間にたたき出して、GZの”風”から順に”烈”まで叩き込んでやった。

”風”を叩き込んだ時点で闇の書が集めた魔力が尽きかけていて消えそうだったのだが、こつちの世界に来てからストレスが溜まっていたようで、ムカついたのでGZから強制的に実体化を維持できる程度のエネルギーを送り無理やり実体化させて、”烈”まで叩き込んだ。

最後の方は意思の無いプログラムのはずが必死に逃げ出そうとしていた。が、逃がすわけも無く最後は”烈”を叩き込みプログラムの基礎の基礎まで完全に消滅させた。

なんと言つかスカツとした

さて、いろいろと弄って遊んでいたら結構な時間がたっていたので今日の所は寝よう。

あ、仮面の男共の事忘れてた。でも別にいいか。死にはしないし  
発狂も出来ないようにしてあるし。

## マジ狩るメイオー編 6（後書き）

原作強制終了のお知らせです。

闇の書の闇が原作キャラに見つかる前に消滅しました。

そして、皆様が？大好きなリインフォースも登場するどころか姿すら出る前に完全に消えました。

さて、これからの話、どうしようかな。

## マジ狩るメイオー編 7 (前書き)

そろそろこのマジ狩る編も終りそうです。

次に冥王様が行くとしたら何所にしようかな？

## マジ狩るメイオー編 7

一晩眠りまた外の世界に出てぶらぶらと考えも無にふらつく。

昨日の時点で闇の書は完全に別の物にしてしまったし、シグナム達はじっくりと弄りたいからとりあえずはおいとくとして、さてこうなるともうこの世界に居る必要が無い気がしてきたな。

この前奪ってきた時空管理局とか言う組織とは関わる気なんて無いし、あの三人に見つかる前にとっと元の世界に戻ろうかな。

そんな風に考えているとシグナムに襲われた公園に着いた。そこで一人で泣いている女の子を見つけた。車椅子に乗っている。

「……あの子は」

「ヒック、うう……」

「どうしたんだ、こんな所で」

「ふえ？あ、昨日のお兄さん」

目を赤くし涙顔で此方を向いた女の子は八神はやてだった。

「あ、あかん。こんな顔見んといて」

そう言いながらまた下を向くはやて。

「……ほら、使いな」

懐からハンカチを取り出しはやてに渡す。

「だ、だめやよ。今そんな風にやさしくされたら、う、うち……」

そんなふうにはやての頭に手を乗せやさしく撫でながら抱きしめる。

「子供が泣くのを我慢するな。胸ぐらいなら貸してやる」

「ううう、うわああああん!!」

そう言つと我慢できなくなったのか大声を上げながら泣き出すはやて。

しばらく声を上げながら泣いていたはやてだが落ち着いたのか傍から離れる。

「ご、ごめんな。お兄さん。服汚してもうて」

「気にするな、洗えば落ちるからな……でどうしたんだ。こんな所で泣いているのは」

「そ、それは……」

其処からばそぼそと小声で話し出したはやて。

どうやらしばらく前から一緒に過ごすようになった新しい家族が昨日から何の連絡もなく居なくなってしまったらしい。しかもその家族が大事に持っていた本、つまり昨日渡した闇の書を三人組の子

供達に奪われてしまったらしい。

その時に、彼らは「闇の書」だとか、「時空管理局法」がどうのこうの言っていたらしい。

取り返そうと追いかけた物の車椅子に座っている以上、限界があり見失ってしまえばらく探し回っていたが見つからず、一度家に帰ろうとしたが誰もいない家に帰るのは嫌でこの公園に来たのだがそこで、”なんでこんな事になったんやろ”と思い出したら涙が溢れてきて泣いてしまった、というわけだ。

「その、すみません。こんな話をしてもうて」

「……いや、かまない」

「……うち、シグナム達に嫌われてもうたんかな。うちが何かしたんかな？だから居なくなってもう何かな……」

「……」

「一人だけで過ごしてきて、初めて家族ができて、浮かれすぎて何かシグナム達に嫌な事してもうたんかな」

そう言つてまた下を向き泣き始める。

「ヒック、嫌や、あの家で一人なんはもう嫌なんや……」

そんなふうに言うはやてに俺は……

「……大丈夫だ。彼女達もすぐに帰ってくるさ」

「なんで、そんな事分かるん」

「俺の勘はよく当たるからだ」

「そうなん？」

「ああ。だから今日は早く帰りな」

「でも……」

「彼女達が帰ってきた時、誰が”おかえり”って言うんだ」

「……！それはうちや！」

「だから早く家に帰って彼女達が帰ってきたらめいっぱい怒ってやればいい」

「……そう、やな。うちが怒ってやらんと」

そう言ったはやては何とか笑顔になっていた。

「なら、うちは帰ります。そのありがとうな。お兄さん」

「かまわん。気よつけて帰るんだぞ」

「うん。ほなさよならや」

はやてと別れた後、すぐさま隠れ家に戻り、シグナム達のデータを完全にコピーした分身のような者を作り上げてはやての所に送り込んだ。

完全にコピーしたとは言ってもそれを実行したのはGZなのでた



だのコピーではない。体は本体の様な魔力で実体化しているのではなく本物の肉体を持ち、人間と同じように年を取り成長し、老化するように作り上げている。無論、子孫も作れる。

……これは偽善だろうか。今の彼女の状況を作ってしまったのは間接的とは言え俺が関わっている。

だから、罪滅ぼしのためにこんな事をしているのだろうか。まあいい。偽善だろうがなんだろうが俺がしたいからそうするんだ。

偽善でも、罪滅ぼしでも関係ない。俺はしたいようにするだけだ。

さて、とりあえずこれで彼女の事はこれでいいが、シグナム達かした事はそれはそれ、これはこれなのでシグナム達にこれからの事を知ってもらおう。

「今の気持ちは如何かな？」

その部屋には三つの大きなシリンダーに三人の女性達が入れられていた。

「あそこに居るのは君達の姿形をしただけの完全な別物だ」

中に入れられている女性達はそれはそれは凶悪な目つきで此方を睨み、暴れようとしているが彼女達は全身を拘束されていて動く事は出来なかった。

「本来ならあの場所で彼女と笑い、泣き、思い出を共有するはずだったのにそれを自分達と同じ姿をした別人が共有する。本物の君達は此处で惨めな思いをしているのに偽者が君達の主と思い出を共有する。主である彼女を守るのは本物の君達ではない。君達の偽者が君達の主を守るんだ。」

彼女達の目に映るのは主であるはやてが自分達と同じ姿をした偽者に泣きながら抱きつき、無事でよかったと言う姿だった。

「確か、君達はベルカ……とか言う場所で騎士をしていたらしいな。どうだい？君達の主が君達の偽者と一緒に笑いあう姿は。これから彼女が死ぬまで彼女と一緒に居て彼女の騎士であるのは君達本物の騎士ではない。偽者の騎士だ」

彼女達は誰も彼もが目から血涙を流し拘束具が当たる部分から血を滲ませながらもがく。

「……これが、俺に手を出した結果だ。君達は君達の不幸を怨むんだな。俺に手を出さなければ今あそこで笑いあってるのは君達だったんだから」

其処まで言っただけで部屋から出て行く。これから彼女達は気が狂う事も許されずただ主である彼女が死ぬまで自分達の偽者達との幸せな姿を見せ続けられるのだ。

「……時空管理局、だったか。」

一言呟く。

「これも俺の我儘だが、かまわない。俺はしたいことをするだけ」

だ  
」

## マジ狩るメイオー編 7（後書き）

時空管理局にフラグが立ちました。

さて、思いつきで進めてきたこのマジ狩るメイオー編。

そろそろ終わりが近づいてきました。

はやては幸せに過ごせるようです。ただしその幸せは偽りですが（家族が偽者という意味で）

後数話でこのマジ狩るメイオー編は終わります。

冥王様はいったいどんな結果を見せてくれるのでしょうか？

## マジ狩るメイオー編 8（前書き）

冥王様とGZが本格的に行動するようです。

ついでにヴォルケンリッターの三人が登場しますが、もうなんと言  
うか別人と思ってください。

## マジ狩るメイオー編 8

シグナム達の居る部屋から出た後、仮面の男達が居る部屋に向かう。

「……さて、どうなってるかな？」

前回入った時から一日以上の時間がたっている。約50年ほどの時間が過ぎ、死んだ回数も1000万回に届く程だ。

本当なら、あの二人を出すのはもっと後のはずだったが俺の都合のために出す事にした。これからあの二人には馬車馬の如く働いてもらう。

「あうあー……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

再び入った部屋ではアリアと言われた方は精神が壊れたのか涎を垂らしながら虚ろな表情で何か呻き声をあげ、ロツテと言われた方は怯え恐怖した表情で謝り続けていた。

「おい」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ああう……」

呼びかけて見たが此方に気が付かない。なので以前と同じように捕獲隔離用バリアの中に電流を流して此方に意識を向けさせる。

「ギヤアアア」

「アギヤアアア」

「気が付いたか？」

「ヒィ」

ロツテは気が付いたようだがアリアの方は叫んだだけでそれだけだった。

「ロツテ、とか言っ たなお前」

「は、はい。私の名前はリーゼロツテといいますう」

「事情が変わった。此処から出してやってもいい」

「え……ほ、本当ですか!!」

「ああ」

「お、お願いしますうう、此処から、此処から出してください  
いい!!」

涙と鼻水を垂れ流し懇願するロツテ。

「……なら、これ以降俺が命令した事は一切の疑問を持たず必ず  
遂行すると誓えるか？」

「誓います。誓いますからああ」

「なら、お前達の主であるグレアムを消して来い」

「お父様を、消す……」

「そうだ。どんな手段を使ってもいい。とにかくグレアムを消して来い」

「無、無理です。私達使い魔は主に対して反逆は出来ない用に……」

「そんな事はすでに解消済みだ」

「え？」

「貴様は俺の言う事に疑問を持つのか？ならまた此処で死に続けたいのか、今度は数年は此処には来ないぞ」

「い、いやああー！！や、やります！！お父様を消しますからそれだけはそれだけはー」

「なら出してやるからさっさと逝って来い。それとこの首輪を付けていけ」

そう言い黒い首輪を差し出す。

「この首輪は貴様が逃げないように監視するための物だ。貴様がもし逃げ出そうとしたり誰かに俺の事を言おうとしたら即座にこの部屋に転移させて今度は何十、何百という死に方を何千何万回と与



え続ける用になっている」

「こ、れが……」

首輪を持つ手が震え、体中から汗を流すロツテ。

「それを自分で付けてから逝って来い」

「は、い」

涙を流し震える手で首輪を付けるロツテ。

「……遂行できたらアリアを元に戻してやる」

「え……」

「駒は多い方がいいだろう？」

「……はい」

全てを諦めた表情を浮かべ頷き、GZによって元の世界に轉移させられる。

「さて、俺も動くか」

時空管理局所属、巡航艦「アースラ」内ブリッチ

「グラム提督が殺された!？」

「ええ、今朝方に本部の局員が発見したようよ」

そういうリンディの表情は暗く、報告を受けたクロノの表情も暗かった。

「いったい誰が……」

「……その事んだけどクロノ、落ち着いて聞いて頂戴」

「艦長、何を……」

「……グラム提督を殺害したのは、リーゼロッテらしいの」

クロノの表情が驚愕に染まる。

「な、馬鹿な!! ロツテがそんな事するわけが無い!! それに使い魔であるロツテが主であるグラム提督を殺せるはずが無い!!」

「そんな事、分かっているわ。でも発見されたグラム提督には一切の抵抗の後が無くさらに本部の記録にはグラム提督の部屋に最後に入って出て行ったのはロツテであり死亡推定時間もロツテが入った時間とほぼ同じ時間だったの」

「そ、んな……」

「クロノ、貴方が信じられないのは私も同じ。でもロツテ以外で

グラム提督を殺害できたのは誰もいないのよ」

「そのロッテが偽者の可能性は……」

「それも考えたわ。でも今現在ロッテが偽者である証拠は何所にも無いのよ」

「くそ!」

「クロノ……」

その様なやり取りをしていた所に、船全体を揺るがす衝撃が走る。

「うわ!」

「っ何が起こったの!」

其処に報告が入る。

「か、艦長! 攻撃を受けました。今の攻撃でアースラのシールド残量が27%までに低下!」

「第二波、来ます!」

「緊急回避!」

「駄目です、間に合いません!」

再び船に衝撃が走る。

「つつ！！報告！！」

「今の攻撃でシールド残量が0になりました！！」

「第一、二通路破損、第五、七、十装甲大破！！」

「駆動部にダメージ！！このままでは航行に支障が起きます！！」

「各員に通達、コレよりアースラは通常空間に緊急離脱。その後付近の惑星に緊急着陸します。対ショック準備！！」

「通常空間に緊急離脱、ならびに付近の無人惑星に緊急着陸」

「衝撃来ます！！」

「全員何かに捕まって！！」

そしてアースラは”都合”よくあつた無人惑星に不時着する。

「……報告」

「不時着の衝撃でさらに第十一、十五、十七装甲破損」

「駆動部にダメージ大、航行は不可能」

「通信機能も衝撃で機能しません」

「搭乗員の安否は」

「衝撃で軽い怪我を負った物はいますが重傷者はいないようです」

「そう、それだけは不幸中の幸いね」

「っ、いったい誰がどうやって……」

「艦長、アースラ前方より高エネルギー反応!!」

「何ですって!!」

「この反応……ウソ、なんで!?!」

「どうしたの」

「高エネルギーの反応は闇の書と同じ反応です」

「なんだと!!闇の書は此方に有る筈だ、そんな事は……」

「でも測定には異常は有りません」

「クソ、何が起こってるって言うんだ」

ブリッチ内は混乱の極みにあつた。突如受けた強力な攻撃に此方にあるはずの闇の書と同じ反応を出す謎の高エネルギー反応。

迂闊に行動は出来ない状態だが、だからといってこのままではやられるのが落ちである。

「……艦長、自分があ反応地点に向かいます。その間に此処から離脱を」

「クロノ!?何を言ってるの」

「このままでは何時やられるか分かりません。なら自分が少しでも時間を稼ぐのでその間に艦長は他の搭乗員を連れて此処から離脱してください」

「そんな事……」

「しかし、それ以外に方法は……」

「艦長!!」

その時、オペレーターの一人が声を上げる。

「どうしたの!」

「高町なのはとフェイトテストロッサの二人が高エネルギーに向かって行きました!!」

「何ですって!?!」

「なのは、いいのかな?勝手に飛び出して」

「大丈夫だよフェイトちゃん。あのままにしてたら皆が危ない目に会っちゃうもん。そんな事はさせないの」

この時のなのはは助長していた。魔法という強力な力を手に入れた。それから、関わってきた事件で彼女は苦戦するも最後には勝った。

その結果が、彼女に無謀な行動を取らせる用になり、そしてその結果彼女は深い深い絶望を知る事となる。

「……来たか」

其処には黒い色のフードが着いたロングコートを着た背の高い人間が一人。

「貴方がアースラを襲った人ですか」

「そうだとしたら？」

「貴方を逮捕します」

「……」

「今ならまだ間に合いますから自首してください」

その言葉を聴いた相手は徐に懷から一冊の厚い本を取り出した。

「デバイス!？」

「何をする気なの!」

「……」

無言で取り出した本を開く男性。

「来い、三猿衆」

言葉と同時に男性が取り出した本が光、其処から三人の女性が登場した。

「見ザル、烈火」

「聞かザル、鉄槌」

「言わザル、泉」

「『三猿衆、参上しました』」

烈火と名乗った女性は目に、鉄槌と名乗った女性は耳に、泉と名乗った女性は口にそれぞれ同じ模様が描かれた金属で出来た拘束具のような物を身につけていた。

「貴様達はこの二人を相手にしろ。俺は向こうに行く」

「分かりました」

そう言い、アースラの方に行こうとしたのを二人が止めようとするも、三猿衆と言われた三人が間に入り、足止めをする。

「其処をどいてください!!」

そう言うも、返ってきたのは烈火と鉄槌と言われた二人の攻撃だった。



「くっ！なのはやるよ」

「分かったなの！」

「アースラ」内ブリッチ

「此方に高エネルギー反応来ます！！」

「二人は！？」

「最初に反応があつた場所で交戦中の模様」

「仕方ないわね。交戦できる者は全員出て足止めを、非戦闘員は至急離脱準備、準備が出来次第準じ離脱！！」

「り、了解しました」

リンディは其処まで言うとかロノに顔を向け命令する。

「クロノ執務官、コレよりアースラ内の戦闘要員全てを引き連れて足止めに向かいます。貴方には先人をきつて貰いたいのだけいいですね」

「分かりました」

そして、戦闘要員全てをつれてアースラに向かって来る反応に急  
行する。

「見えた！」

アースラに向かい飛行しながら向かってくる男性を見つけ警告す  
るクロノ。

「そこで止まれ！！それ以上の進行は認めない」

「……」

その言葉を見捨て進んでくる男性。

「警告を見捨てるか！なら！！」

自分が持つデバイスを男性に向け威嚇射撃をしようとするが

「！！」

”魔法”が発動しなかった。

「これ、は……」

「……私に魔法は通用せんよ、クロノ」

「僕の名前を！！誰だ貴様！！」

「やれやれ、私の声を忘れたのかね？」

そう言いながら、フードを外す男性。その顔は

「な！！あ、貴方は！？」

「久しぶりだな、クロノ」

死んだはずのギル・グレアム提督本人の顔だった。

「……しばらく見ないうちに大き……男らしくなったな」

「何で言い直すんですか！！ってそれよりも何で死んだはずの貴方が……！」

「簡単な事だ。今の私は闇の書の主だからだ。偽装死亡も簡単な事だ」

その言葉に驚愕するクロノ。

「闇の書だって！！あれはアースラに有るはず……」

「あれは見た目だけをコピーしただけのゴミにすぎん」

「ニセモノだって言うのか」

「そうだとも。いやはや笑わせてもらったぞクロノ。貴様達が何の疑いも持たずゴミを持っていたのは」

そう言うグレアムの顔は酷く歪んだ笑顔を浮かべていた。

「貴方が持っているのは僕の父さんを、貴方の部下であった父さ

んを殺した原因を作った物なんだぞ！！それを……」

「彼の事は残念な事だった。だがそれだけだ」

「それだけだと！！」

「そうだとも。彼の事はすでに終わった事だろう。何を今更……」

「……貴方はそんな事を言う様な人ではなかったはずだ」

「クク、分からんぞ。そういう風に振舞っていただけかもしれないぞ？」

「……なら僕は時空管理局員として貴方を逮捕します」

目を滲ませながらもグレアムに言い放つクロノ。

「クク、カカカカカ！！私を捕まえるのかクロノ！！闇の書の主たる私を！！」

笑い、歪んだ表情でクロノを睨むグレアム。

「貴方は僕が尊敬する人だった。だが今の貴方はただの犯罪者だ！！犯罪者を捕まえるのは執務官の義務だ！！」

「義務か……下らん、下らんぞクロノ！！それに貴様に私を捕まえるのはや不可能だ！！私が何故貴様とこうして長々と話をしていると思う？」

「何を……」

グレアムは手に持った本を高く掲げて言い放つ。

「無差別完全蒐集開始！！」

その言葉と共にクロノと周りを囲んでいた戦闘員の胸から何かを掴み取るように黒い手が飛び出した。

「グアアアア！！」

「ギアアアア！！」

「ギ、ツイイ！！」

周りから聞こえてくる悲痛な叫びに

「ククク、カカカカカカカ！！！！」

まるで甘美な声を聞いたように笑い出すグレアム。

「な、に……を、した、グレアム！！！！」

苦痛に耐えながら問いただすクロノ。

「何、簡単な事よ。リンカーコアを持つ者から魔力、いや魔力を生み出すリンカーコア自体を魔力ごと蒐集しただけよ」

「なん……だ、と」

「これは歴代の主達がしてきた魔力だけを蒐集するものとは違い、魔力を生み出すリンカーコアごと完全に蒐集するものだ。まあこの蒐集の仕方では同じ者に対しては一度しか蒐集できないのが難点だ

がな」

「く、そ……」

激痛に意識が遠のくクロノ。

「安心したまえ、クロノ。命までは”私”はとらんよ」

そう言いながらクロノ達の間を抜けアースラに向かうグレアム。

「……もつとも、この惑星には隔離指定された猛獣がいるが、まあ頑張りたまえ」

かくして始まる終わりの歌

死者を操るのは冥府の王

その世界に齎されるのは

破滅か再生か

まだ誰にも分かりはしない

マジ狩るメイオー編 8 (後書き)

黒服の男がキノと思った人。

掛かったな、馬鹿め!!



という事で黒服の人は故人グレアムさんでした。

手順としては

ぬこ、グレアム暗殺

GZ様、守護騎士プログラムの応用でグレアムの記憶と肉体をコピー  
肉体をそのままにしてコピーの方に冥王の書を持たす

記憶と精神を弄って行動開始させる

こんな感じ。アースラに攻撃したのはGZ様ですが。

本当は黒服の人はキノだったんだけどせっかくぬこに頑張ってもらったんだから主のグレアムさんにも頑張ってもらおうと思い、こんな感じに。

死体に鞭打つキノ & GZマジ外道。

ヴォルケンリッターの三人はとあるゲームにでてきた三人組みっば  
くなってもらいました。

そのまま出すのも何か味気なかったのでこんな感じに。

三人に調整するためにザフィーラとリインフォースは犠牲となった  
のだ……

菜っ葉と露出趣味の子は次回に回します。

落ち考えとかないと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0170x/>

---

マーシーの短編集

2011年10月29日21時43分発行